

Title	ジェンダーの視点から見たギリガンのケアの倫理におけるパラダイムシフトの意義：生活世界を生きる人間の学としての倫理学に向けて
Author(s)	高山, 佳子
Citation	臨床哲学. 15(2) P.2-P.19
Issue Date	2014-03-31
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/29218
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ジェンダーの視点から見たギリガンのケアの倫理におけるパラダイムシフトの意義

——生活世界を生きる人間の学としての倫理学に向けて

高山 佳子

はじめに

心理学者キャロル・ギリガンは、主著『もうひとつの声』において、公正な論理的推論（以下「公正推論」と呼ぶ）を中心とするコールバーグの道徳性発達理論が含意するジェンダーバイアスを指摘し、従来の発達理論では男性の発達が人間の発達として普遍化され、女性の発達が十分に捉えられてこなかった点を批判した。そして、女性被験者等へのインタビューを通じて道徳判断には公正推論とは異なるもう1つの様式があるとして、それを「配慮と責任の倫理」として提示した。ギリガンの命名に倣い、公正推論による道徳判断は「正義の倫理」と呼ばれ、配慮と責任の倫理の方は「ケアの倫理 (an ethic of care)」と呼ばれる。ギリガンの提示したケアの倫理は、男性中心の社会的価値規範への問い直しを含んだジェンダーの視点¹を喚起し、正義の倫理と対比されるかたちで政治哲学・倫理学・法学・社会学などの分野で活発な議論を呼んできた。とりわけ哲学倫理学領域においては、いわゆるケア対正義論争と呼ばれる議論において、規範としての正義の倫理とケアの倫理との関係およびその統合の如何が問題とされてきた。この論争における2つの倫理の関係の見方は、現在のところフェミニスト陣営を中心とする政治的社会的議論に舵をとられ、正義の倫理＝男性の道徳性、ケアの倫理＝女性の道徳性という生物学的性 (sex) にもとづくジェンダーの見方²によって規定されているのが現状である。しかしながら、こうしたジェンダーの見方に制約されたところで両者の関係を論じる限り、ケアの道徳性を女性の領域に限定し、却ってジェンダー化された社会構造を強固にしてしまうばかりか、ギリガンの批判に込められた従来の人間観および社会的価値規範そのものを問い直す視点を見落としてしまうことにならないだろうか。

だが、ギリガンは『もうひとつの声』の「はじめに」で次のように述べていた。「異なる声」ということばは、ジェンダー（性）のちがいによる「異なる声」という意味ではありません。

むしろ、テーマのちがいがらくる「異なる声」という意味にとっていただきたいと思います」(Gilligan, 1982:2)。ギリガンが強調していたのは、「人びとが道徳について語る時の語り方には2通りあるということ、また、他人と自己との関係を述べる時の述べ方には2通りあるということ」(ibid.:1)であり、ギリガンは、自己と他者との関係の捉え方の違いからくる道徳観の違いについて、それまで1つの捉え方しかなかったところに、もう1つの捉え方を、それまで聴かれることのなかった「もうひとつの声」として提示したのである。もう少し具体的にいえば、ギリガンによれば、「他人からの分離と、他人との結びつきの、どちらを優位におくかによって、それぞれ異なる自己および関係性のイメージが導かれる」(ibid.:38)。一方の正義の倫理では、「世界というものを自立している人びとから成る世界」、「規則のシステムで成り立っている世界」と考えているのに対し、もう一方のケアの倫理では、「関係性で成り立っている世界」、「人間のつながりで成り立っている世界」と考えている。ゆえに、正義の倫理は権利主体としての自律した個人を前提とし、論理形式的推論によって財の公正な配分を指向する権利の倫理であるのに対し、ケアの倫理は、他者との相互依存関係を前提とし、他者を配慮し応答することを指向する責任(応答可能性)の倫理である。つまり、ギリガンが主張しているのは、「個体化(individuation)と関係性(relationship)の経験」(ibid.:7)の違いにより、「自己と他者との関係の捉え方」は1つではないということであり、それによって道徳問題の見方も変わるということである。ギリガンにとってケアの倫理は、もう1つの関係性の見方における、もう1つの道徳性であり、ギリガンにおいては、男女ともに正義の倫理とケアの倫理とが相補的に統合されたあり方こそ、成熟した人間の道徳性と考えられている。このように、ケアの倫理を人間の道徳性をなす2つの原理のうちの1つとして捉えるギリガンの発達心理学的、人間学的な視点は、近現代の理性中心主義・男性中心主義の価値観や人間観のもつ問題性を指摘し、ケアの倫理が意味するものへと目を向ける点で重要な意味をもっている。したがって、肝要なことは、ケアの倫理をもっぱら生物学的性にもとづくジェンダーの観点で捉え反応してきたこれまでの見方を捉えなおし、本来のギリガンの批判の意義を正しく受けとめなおすことであろう。

本稿の目的は、現在の哲学倫理学においてケアの倫理の見方を規定している生物学的性にもとづくジェンダーの観点を脱却するために、今一度心理学に立ち返り、ギリガンの研究が心理学にもたらした新しい視座とそのパラダイムシフトの意義について考察し、倫理的次元におけるパラダイムシフトを試みることである。まず第1節において、コールバー

グ対ギリガン論争のその後の実証的検証結果と論争が抱える方法論的ジレンマについて述べる。次いで第2節において、ジェンダーの心理学におけるジェンダーを捉える視点の歴史の変遷を概観し、第3節において、ギリガンの研究の新しい人間学的視座とパラダイムシフトの意義について検討する。最後に第4節において、倫理的次元において生物学的性にもとづくジェンダーの見方を脱却し、ケアの倫理をパラダイムシフトとして捉えることの意義を考察する。

1. 心理学分野におけるコールバーグ対ギリガン論争が抱える方法論的ジレンマ

コールバーグとギリガンの論争以降、心理学分野ではその後約四半世紀にわたりジェンダーと道徳性をめぐる実証的検証研究が数多く蓄積されてきた。近年、ウォルカーやジャッフェ等により、これまでに蓄積された広範囲にわたる多様なサンプルによる諸研究の検証結果をメタレベルで検証するレビューがなされ、論争に関する総括が出されている³。それによれば、コールバーグ対ギリガン論争は、実証的検証の結果性差はないという結論で終局を迎えたようである。しかしながら、問題は性差がないという検証結果をどう捉えるかにある。ウォルカーをはじめ心理学の伝統的な量的統計的手法に従う研究者たちは、インタビュー手法を用いるギリガン等の理論は他の研究者が検証することが困難である点で測定法に妥当性を欠いていると批判している (Walker, 2006:109)。他方ジャッフェ等は、メタ分析で取り上げられた研究者の誰もギリガン等女性の発達理論研究には関わっておらず、道徳推論における性差に関し量的実証研究を行う研究者たちと、ギリガンを中心とする女性の道徳的声の理論化に取り組む研究者たちのあいだにほとんど関わり合いがないという矛盾を指摘している。つまりジャッフェ等によれば、伝統的測定法を用いて信頼性と妥当性を測る量的研究とインタビューを中心とする解釈的アプローチによる質的研究とでは、そもそもよってたつ研究の枠組みそのものが異なるために両者のあいだには方法論的ジレンマがあり、性差に関するそれぞれの主張は、共通の評価基準のないまま議論のすれ違いを生じているというのである (Jaffe & Hyde, 2000:721)。

ギリガンによれば、『もうひとつの声』に対する多くの応答が伝統的な枠組みの内部で議論しているために、「声の変化は枠組みにおけるシフトであるという声についての私の指摘を誤解している」(Gilligan, 1994b:421)、「議論は結論にいたらない」(Gilligan, 1994a:410)と述べている。次節でみるように、ギリガンの研究は心理学に新しい視座と

研究パラダイムをもたらした。ギリガンにとって声を聴くことを中心とするアプローチは、従来の研究パラダイムにおける手法とは異なるパラダイムへのパラダイムシフトを意味している。そこではジェンダーを捉える視点そのものが異なるために、従来のパラダイムの内部で考える研究者とのあいだで理解に齟齬が生じているのである。「インタビューによってのみ異なる声を見いだせる」(ibid.:416)と述べるギリガンは、その後ハーバードプロジェクトにおける声中心のアプローチによる女性の発達研究へと向かっていった⁴。

こうしてみると、ギリガンのいうパラダイムの違いを認識しないまま、ギリガンの主張をさまざまな性差を比較する量的研究に持ち込み、既存のパラダイムの中で測定し評価することは、ギリガンの主張の本質を捉え損ねることになろう。同時にこのずれの違いは、伝統的パラダイムで思考する研究者たちにとって、伝統的パラダイムを超えてギリガンの主張を捉えることがいかに困難であるかを示してもいよう。そしてこのことは、心理学に限らず哲学倫理学分野でも同様である。ケア対正義論争において、ジェンダーによる差異(性差)の問題を心理学における実証的次元の問題として倫理学分野と区別し、社会規範や価値の問題が倫理的次元にもちこまれるとき、ケアの倫理はまたしても倫理学の伝統的パラダイムのなかで女性の道徳性として捉えられることになる。というのも、倫理的次元ではこれまで通り論理的推論・客観性・普遍性を重視する正義の倫理を正統とする見方が前提されており、そこにジェンダーバイアスが働いていることは留意されないからである。

したがって、ギリガンの主張したケアの倫理の意義を正しく捉えるためには、何より倫理的次元において生物学的性にもとづくジェンダーの観点を脱却することが不可欠である。そこで、以下では今一度心理学分野に立ち返り、ジェンダーの心理学におけるギリガンの研究の位置づけとパラダイムシフトの意義を検討していくことにしたい。というのも、ジェンダーという人間の性(性差)を扱うジェンダーの心理学の歴史の変遷は、私たちに強固に根づいている生物学的性にもとづくジェンダーの観点を脱却するために必要な知見を提示してくれているからである。

2. ジェンダーの心理学における生物学的性にもとづいてジェンダーを捉える視点の限界

狭義の心理学が経験科学として哲学の領域から独立したのは19世紀後半であるが⁵、それとほぼ同時期から「性差」⁶にもとづき男女の能力や行動特性の違いを明らかにしよ

うとする科学的研究が行われてきた。その後 20 世紀に入り、1970 年代のフェミニズム運動を機に心理学に心理・社会的性を意味する「ジェンダー (gender)」⁷ の用語が登場すると、性差研究は次第にジェンダーの視点から取り込まれるようになり、現在では「ジェンダーの心理学」と呼ばれる 1 つの心理学領域を確立するまでになった。欧米の研究を取り入れつつ発展してきた日本の心理学においても 1980 年代後半よりフェミニズムの視点から書かれた心理学文献が登場し始め、ジェンダーの心理学が発展しつつある。それらを参照しつつ、以下ではジェンダーの心理学におけるジェンダーを捉える視点の歴史の変遷を簡単に概観し、生物学的性にもとづくジェンダーの見方の限界について検討する。

伊藤 (1984) によれば、性差研究は 19 世紀後半に始まる個人差研究に端を発し、個人差を記述する際の変数の 1 つとして、年齢・人種・階層などとともに性差 (性別) がとりあげられた。その後 20 世紀に入り、ビネーの知能テストなど個人差を測定するための各種心理テストや測定用具が開発されるに従い、知能・運動能力・性格特性など男女の性差を量的統計的に比較する「性差研究」が隆盛していった。この時代に性差研究が増加していった背景には、産業革命の進展に伴う「大量の工場労働力としての女子の出現、および義務教育の実施、高等教育の女子への解放が、作業能率における性差、知能における性差への関心を呼び覚ました」(伊藤, 1984:26) という社会的事情があげられる。それ以前は、男女の能力や特性の相違は先天的なものとされ、男性が女性に優ることを当然視する風潮のなか、性差は問題にもならなかったのである (ibid.:24-26)。

1930 年代に入ると「性差を男女の優劣の差から特質の差として見る見方」(伊藤, 1995:143) が広まり、性差を「性度」という 1 つのモノサシで測ろうとする「性度研究」⁸ が増加していった。その後、第二次世界大戦を契機とした社会状況・家族状況の変化、および戦後の女性の職場進出に伴う役割の変化を背景に、男女の行動や特性の違いは「性別という地位」に基づいて期待される「役割」の差によってもたらされるという見方が生じ、以後性による役割の差をつくり出す文化的・社会的条件を明らかにしようとする「性役割研究」が隆盛する。性役割の習得は子どもの社会化の過程で重要な発達課題の 1 つと考えられ、子どもが性役割をいかに学習・獲得・発達させ社会化するかという発達心理学的な視点を含んだ性役割研究が質・量ともに飛躍的に増加したのである (伊藤, 1984:26-27)。

その後 1970 年代に入ると、1960 年代後半に始まった女性解放運動の刺激を受け心理学にもフェミニズムの視点が芽生え、生物学的性 (sex) に代わり心理・社会的性を意味

するジェンダー（gender）の用語が登場する。以後、性役割研究は、生物学的性によって役割を規定する性別役割分業を性差別の観点から問い直そうとするジェンダーの視点から取り組まれるものへ変容を遂げていくことになる（ibid.:29）。

また、フェミニズムの視点からは、「性差はほんとうに存在するのか」と性差の存在そのものを疑問視する観点から過去の性差研究の成果を再検討する諸研究が出始めた。それまでの通説をくつがえし、性差研究に関するコンセンサスを得ることになった代表的研究が Maccoby & Jacklin の『性差心理学』（1974）である。伊藤によれば、1960年代から73年にかけて発表された1,400編余りの研究が概観され、その結果明らかにされたことは「通説とされてきた心理学的性差の不確実性」（伊藤，1984:24）であった⁹。さらに1980年代に入ると、「メタ分析」とよばれる新しい統計的手法が発展し、それまでの性差研究の統計学的欠陥を指摘し研究結果の再評価を主張する研究が出始めた。Maccoby & Jacklin の研究を含めこれまでになされたメタ分析の諸研究の結果をレビューした東（1997）によれば、いずれも顕著な性差は認められないか性差を確証できないという結果であった¹⁰。東は、「生物学的性別を被験者変数とした性差研究には限界があることが判明しつつある」（東，1997.:161）と述べている。

このように、フェミニズムの視点が登場する以前の性差研究においてジェンダーを捉える視点は、ジェンダーの違いを優劣の違いとみる見方から特性の違いとしてみる見方へ、さらに役割上の差異としてみる見方へと変化した。当初もっぱら男性の視点から取り組まれた性差研究の知見は、男性からみた女性の能力や心的特性に関するステレオタイプな見方を正当化し、社会における性別役割分業を擁護する役割を果たしてきた。その後、フェミニズムの視点の登場を機にジェンダーを捉える視点は大きく転換し、性差の存在そのものが問われ始めた。そして100年余りに及ぶ実証的性差研究の結果が示したことは、性差を科学的に確証することの困難さであった。こうした生物学的性にもとづく性差研究の限界は、それでは一体「性差（性）とはなにか」という「性の意味」への問いを改めて提起しているように思われる。つまり、ジェンダー（性）とは何かという問いを不問にしたまま行われてきた性差研究が、100年余りを経た現在はずもジェンダー（性）の意味という根本的な問いに行きついたように見えるのである。

3. ギリガンの研究の新しい視座とパラダイムシフトの意義——自然科学をモデルとするパラダイムから生活世界を生きる人間の学としてのパラダイムへ

さて、1982年に上梓されたギリガンの『もうひとつの声』は、ジェンダーを軸に据えることによって、それまで等閑視されていた女性の経験や発達の事実を見出し、普遍的とされてきた理論や原理そのものを問い直そうとするものであり、「男女に同じ課題や尺度を適用して、男女の差異を生物学的性差でもって量として表現するという、これまでの性差研究の常套的な手法に対して、新しいパラダイムを提示した」(湯川, 1995:125)と言われる。ギリガンにとって、ジェンダーは属性としての生物学的性でもなければ単なる変数でもない。ギリガンの研究は、生物学的性にもとづいて男女の行動を比較するという従来の研究パラダイムのなかにはもはやなく、現実の男女の経験とその心理現象を問題とするより臨床的なパラダイムに近づいており、ギリガンのジェンダーを捉える視点は、心理・社会的な性(生)においてあらわれる人間そのものに向かっている。つまり、ギリガンの視点は、人間を数量化することによって「性差の存在」を明らかにすることではなく、生きた人間そのものにおいて「性(生)の意味」を問う人間学的な視座に転換されており、いわば、ジェンダーを捉える視点そのものがパラダイムシフトしているのである。

ここでパラダイム(Paradigm)とは、科学研究の前提となる基本的な考え方と方法論を意味するが、それではギリガンの新しい視座が位置する新しい研究パラダイムは具体的にどのような考え方と方法論といえるのか。ギリガンは、従来の伝統的心理学のパラダイムを「家父長的パラダイム」と呼び、家父長的声と関係的声との違いを聴き分けることがパラダイムシフトを明らかにし、人間世界の概念を変えると述べている(Gilligan, 1995:120)。強いていえばギリガンの目指すパラダイムは「関係的パラダイム」といえるものであるが、心理学がいまだ従来のパラダイムのうちにある現在、新しいパラダイムについて十分に体系づけられた説明がなされているわけではない。ここでは、フェミニズムの視点からギリガン同様パラダイムシフトを提言している日本のしま(1985)による心理学批判を参照しつつ、新しいパラダイムの意義を考察することにしたい¹¹。しまは、現代の心理学への批判的立場にたつ現象学的心理学と視点を共にする立場から、「いま・ここで、体験する主体としての個人」にアプローチする現象学的立場(しま, 1985:45)を重視し、生活世界を切り離れたところとなりたっている科学としての心理学から、現実を生きる生活感覚に根差した人間の科学にふさわしい心理学へのパラダイムシフトを提言

している。しまはそれを「自然科学をモデルとしたパラダイム」から「生活世界を生きる人間の学としてのパラダイム」(ibid.:171)に向けてのパラダイム変換と呼んでいる。

しまの批判を要約すれば、実験心理学が創始して以来、伝統的なパラダイムにおける心理学の方法論は物理学を模範とし、検証可能な測定法を用いて客観的データを統計的に処理し、法則を見出すことによって行動を予測する「行動の科学」である。こうした自然科学モデルに立脚する科学としての心理学は、人間の生活世界を切り離れたところとなりたっている。というのは、生物学的性にもとづいて性差を測定する性差研究では、ジェンダーを生物学的性という人間の一属性に還元し、個人の心理的特性や行動を現実の社会的文脈を捨象したところで要素としてとりだし、抽象化した量に還元することを意味する。そのようにして測定された性差は人間の心理的特性や程度をみるための社会的な指数であり、そこで想定されているのは、いわば抽象的に思考された男性一般もしくは女性一般であって、現実の生活世界を生きる個人の心的体験とはかけ離れたものである可能性が高い。にもかかわらず、科学としての心理学においては、個人の心理的事実よりも科学的数値という抽象的論理の客観性が重視されることになる。だが、性差の科学的知見が私たちの日常生活感覚に根差したものでないとしたら、それは何のための誰のための科学なのだろうか。

また、しまによれば、生物学的性にもとづいてジェンダーを捉える視点には「性差別の芽が存在している」(ibid.:253)。なぜなら、「性差が生殖機能の差という生物的事実を超えて、社会的・文化的な性をめぐる“らしさ”のイメージとして固定し、そこに人為的な価値の視点が加わるとき、性差は性差別を生む原因となる」(ibid.:255)からである。区別し比較し価値づけるまなざしは、価値が高いとされた側に有利に働く。一方の性が主導権を握る社会にあって、その価値基準を前提にしたところで生物学的性にもとづいて性差を扱うことには、データを解釈する側のジェンダーバイアスが常に関与する。ゆえに、実証的な性差研究は決して客観的とも価値中立ともいえないものである (ibid.:247-287) ¹²。

このように、心理学におけるフェミニズムの視点は、人間を対象化して扱うことが客観性や価値中立を意味しないということに気づき始めている。つまり、科学としての心理学批判を通じて、フェミニズムの視点は、これまで自明視されてきた科学的研究の普遍性・客観性・真理(正しさ)といった概念を根底から問い直す地点に立っているのである。

かくして、しまが提唱するのは、対象としての人間ではなく、「場」を共有し、共にかかわり、関係を分かち合う人間(ibid.:171)という人間の捉え方であり、「生活世界を生きる人間の学」としての心理学である。しまによれば、伝統的パラダイムにおいて要素

に分解し抽象的な量に還元することによってこぼれ落ちる質の領域にこそ、「生きた人格」としてのひとりひとりの人間の個別性を問題とする学問の可能性がある。そこでは、「主体としての体験を、第三者の視点から観察可能な形に翻訳せず、体験そのものを記述的に理解しようとする」(ibid.:165) 視点と、その質の意味や実態を適確に捉える方法論が必要とされるのである。この新しいパラダイムでは、人間の行動の理解(=行動の科学)ではなく、人間(心的世界)の理解(=人間の科学)がテーマである。生活世界は、いわば人同士が関わり合いともに生きあう人間関係の場としての社会であり、それは抽象的論理の科学の世界に先立って私たちが経験している「私たちの生きる世界」なのである¹³。

そしてしまによれば、この人間理解のカナメとなるのが「自我の主体性」(ibid.:108)である。しまは、従来の自然科学パラダイムの心理学の弊害として、「心理学の理論が、個の自立の問題に正面から取り組んでこなかった」(ibid.:51) ことを問題提起し、次のように述べている。「自立(independence)と相互支持(interdependence)は、日常生活過程のあらゆる場面のタテ糸とヨコ糸として、社会関係を支えている。これを相対的に切り離して、一方をより重要なものとして選び取ることの誤りは、これまでの心理学理論では指摘されていない」(ibid.:52)。誤解してはならないのは、しまのいう「自立」とは「独立(independence)」(=非依存)のことではなく、「相互支持(interdependence)」は単なる「依存(dependence)」ではないということである。そうではなく、自立と相互支持がタテ糸とヨコ糸として相互に織り合わさってこそ本当の意味での「自立」が可能であり、鷺田が述べているように、「自立」とは「independenceではなくて、むしろinterdependence(支えあい、頼りあい)のこと」(鷺田, 2013:247)なのである。

自立は、心理学の概念ではアイデンティティの形成にほぼ匹敵するが、しまの指摘は、関係性と切り離された自立の概念を問題視し、アイデンティティと関係性を両軸に人間のパーソナリティの成熟をみようとするギリガンの主張と呼応するものである。ギリガンによれば、道徳的関心を生じる関係性の見方には、自立した個人同士の関係性をみる「正義のパースペクティブ」と人間相互のつながりをもとに関係性をみる「ケアのパースペクティブ」の2つの位相があり、ギリガンはこの2つのパースペクティブの関係を反転図形にたとえて説明している。つまり、道徳的問題には関係性をみる2つの見方、異質な2つの位相があり、反転図形における知覚構成と同様、2つの位相は異なるロジックで構成され、一方のパースペクティブを他方のパースペクティブに還元することはできない(Gilligan, 1987a:31-35)。ゆえに、1つの見方のなかである指向を組み込もうとす

る努力は、「パースペクティブにおけるシフトを伴って生じる関係性の再構成を見失う」(Gilligan, 1987b:295) ことを意味する¹⁴。つまり反転図形は、「いかに同じ状況が少なくとも2つの異なる仕方では組織されるか、また、いかに1つの見方が他の見方を消失する原因となるか」(ibid.:283) を説明するメタファーなのである。これまで長い間、哲学や心理学においては正義のパースペクティブのみで人間の自立や正義が考えられてきた。だが、ギリガンからいえば、ケアのパースペクティブという相互依存にもとづくもう1つの関係性の位相があり、ギリガンは、2つの関係性のパースペクティブが相補いあうところに自己と他者との関係を真に生きることのできる成熟した人間(男女)をみている。ゆえにギリガンは、もう1つの関係性の位相をみることなく分離を自立とみなし、「道徳的発達に1つのパースペクティブから査定される場合に生じる問題」(ibid.:294) — 一方は他者の排除を意味する利己性の問題、他方は自己の排除を意味する利他性の問題(Gilligan, 1987a:43) — をパーソナリティ発達とその自立の観点から問題視するのである。

かくして、ギリガンは決して女性の道徳性を主張しているのではない。ギリガンが女性の声にケアの倫理を見出したのは、生活世界において関係性を生きる人間の体験の質を主題化したからであり、ケアの倫理は生活世界を生きる生活者の立場にたった正義の問題なのである。「語られない前提は、人が関係性を生きており、自己は関係性のなかにいるということ」(Gilligan,1994:409)、「私の仕事は関係性という考えを真剣にとりあげようとする方法を要請する」(ibid.:411) とギリガンは述べている。これまで等閑視されてきた関係性の領域に着目し、女性の発達を問い関係性の理論化を目指すギリガンの視点は、生活世界に目を向けるしみの視点と通底していよう。このように、フェミニズムの視点から方法論的にも概念的にも従来のパラダイムからのパラダイムシフトを提唱する両者の視点は、要素主義的にみられた役割でも規範でもなく「人間自身」に目を向け、ともに人間学的な視座から現代の人間観、科学観、道徳性を問い直そうとする地点に立っている。何より、新しいパラダイムにおいて両者がともに重視するのは、関わり合う人間の結びつきと自立の問題なのである。

4. 倫理的次元におけるパラダイムシフトとしてのケアの倫理の意義——生活世界を生きる人間の学としての倫理学に向けて

以上見てきた心理学分野におけるギリガンの研究のパラダイムシフトを踏まえ、以下では、再びケア対正義論争に立ち返り、倫理的次元において生物学的性にもとづくジェンダーの見方を脱却し、ケアの倫理をパラダイムシフトとして捉えることの意義について考察していく。ここでは、30年余りにわたるケア対正義論争の展開を詳細に概観し、その動向を総括している品川（2007）の議論を手がかりに、論争においてケアの倫理を規定しているジェンダーの観点をみていくことにしたい。品川によれば、ケアの倫理と正義の倫理の関係を考えるうえで、複雑に錯綜する議論を整理し問題連関を切り分けて考える必要があるとして、まずケアの倫理の出自である発達心理学の実証的次元と、規範や価値を含意している倫理的次元とを区別し、さらに倫理的次元を、規範レベル、基礎づけレベル、メタ倫理学レベルの3つに区別している（品川, 2007:147-149）。そのうえで品川は、性差の有無に関しては実証的な研究によって決せられるべきであるとして、倫理的次元におけるケアと正義との関係について規範レベルの対立と基礎づけレベルの対立とに留意しつつ分析を行っている。

先に2つの倫理の統合の可否をめぐる品川の見解をみておくと、品川によれば、2つの倫理は、いずれも一方から他方を導出することのできない相いれない異質な倫理である。そのため、2つの倫理を統合できるかどうかという問題は、倫理の根底は正義なのかケアなのかという基礎づけに関わる問題である。したがって、一方の規範を他方の規範に組み入れる、いわば同化するかたちで両者の統合を主張することは、規範レベルでは可能であるとしても基礎づけレベルにおいては不可能である。また、メタ倫理学レベルでいえば、ケアのメタ倫理学上の立場が個別主義であるのに対し、正義のメタ倫理学上の立場が普遍主義であるという点で、2つの倫理はここでも対立する（ibid.:154-163）。品川の見立てによれば、現在の論争の大部分は規範的レベルの議論に終始しており、それらの多くが統合を主張している。だが、基礎づけレベルとメタ倫理学レベルでは統合不可能なのだから、2つの倫理の関係は統合というよりもむしろ異質な2つが相補的に関係し合うとみる方が妥当な捉え方だろうと述べている。そして品川は、ヘルドのいう相容れない2つの異質な倫理を編み合わせて考えていく「編み合わせ（enmeshment）の比喩」¹⁵（ヘルド, 2006:68-72）、もしくは、ギリガンのいう2つの倫理を2つのパースペクティブと

して対等かつ交互にみる「反転図形の比喻」¹⁶を2つの倫理を相補的な関係として捉える視点として取り上げ、そこに現在のケア対正義論争のひとつの到達点をみている（品川、2007:214-240）。

さて、以上のように問題区分を整理されたケア対正義論争におけるジェンダーを捉える視点について、それぞれの次元でみていくことにしたい。まず、発達理論の実証的次元については、先に見たとおり四半世紀にわたり蓄積された実証的検証の結果、性差はなく、ギリガンのモデルは誤りだと結論づけられた。だが、ここで留意しておきたい点は、実証的次元においてジェンダーを捉える視点は、生物学的性にもとづくジェンダーの見方であるという点である。この視点は、ギリガンの批判を最初から生物学的性にもとづいたジェンダーの見方で捉え、公正推論を男性の道徳性、ケアの倫理を女性の道徳性と仮定したところで、性差の有無を実証的に明らかにしようとするものである。ギリガンのいうように両者のあいだにパラダイムの違いがあるとすれば、この実証的検証結果が何を意味しているのかを見極めることが肝要だろう。

次に、倫理的次元においてジェンダーを捉える視点はどうか。品川によれば、近代の支配的パラダイムである正義の倫理との対比において見出されるケアの倫理の特徴として、非対称な力関係、周縁的他者の主題化、生命の傷つきやすさに対する認識、感受性の重視、があげられる。これらの点で正義と「境を接する」ケアの倫理は、個別主義道徳として正義の倫理だけでは見過ごされうる面を補完する役割を果たすとされる（ibid.:265-269）。つまり、倫理学が伝統的に正義の倫理を正統と考えてきた限り、ケアの倫理は正義の倫理の範疇から周縁化された者からの異議申し立てであり、正義の外部に位置づく異質な倫理とみなされているわけである。だが、そもそもケアの倫理を正義の外部とみる見方自体が、正義の枠組みのなかでケアの倫理をみていることに他ならない。ケアの倫理を個別主義と捉え正義の外部に位置づける以上、2つの倫理はメタ倫理的レベルで対立関係にあり、それは公的領域（＝男性）と私的領域（＝女性）という区別を通じて暗黙裡に生物学的性にもとづくジェンダーの見方に通じていよう。

こうしてみると、どちらの倫理が優れているかに始まり、それぞれを独立した規範として相補的にみようとする視点まで、ケアの倫理が登場したことに対する正義の倫理からのケアの倫理の受けとめ方は、労働市場への女性の登場を機に、いずれの性が優れているかに始まり、ジェンダーを優劣において捉える視点から特性や役割の違いとして捉える視点まで、男性の視点からなされた性差研究においてジェンダーを捉える視点の変化に似てい

る。双方に共通しているのは、女性ないしはケアの倫理を対象として捉え、要素主義的に分析しようとする男性統治者の視点である。要するに、心理学における実証的次元においても、哲学倫理学における倫理的次元においても、ジェンダーと道徳性をめぐる問題は生物学的性にもとづくジェンダーの観点から規定されているといつてよく、ケア論者がケアの倫理を女性の倫理と標榜するか否かにかかわらず、ケアの倫理は女性の道徳性という文脈で解釈されているのが現状なのである。

科学としての心理学と哲学とは対照的なものと思われているにもかかわらず、心理学同様、従来の伝統的パラダイムに位置する倫理学もまた、関係性を捨象したところで自立した個人（＝男性）同士の関係における正義を論じる点で、生活世界とは切り離されたところとなりたっている。その伝統的倫理学のパラダイムにおいてケアの倫理が規範として受け入れられ、規範としてのケアと正義の関係が比較され評価されるとき、そこで考慮されているのは、男性統治者の立場から見た、いわば配分的正義に代わる配分的ケアの問題である。そこには、生活世界を生き成長する主体としての人間の側にたつ人間学的視座は見られないばかりか、人間そのもの、あるいは正義そのものへの異議申し立ての力は無効にされてしまっている。とすれば、心理学同様倫理学においても、生活世界を生きる人間の生（性）そのものに視座をおいた倫理学は、いまだないというべきかもしれない。

筆者は、対象としてみられた規範としてのケアないし正義を論じる規範倫理学の土俵にはたさない。また、生物学的性にもとづくジェンダーの観点はとらない。伝統的パラダイムの内部にたつ限り、両者の対立は維持され相補的対話は不可能であり議論はどこにも到達点を見出せないだろう。今肝要なことは、生物学的性にもとづくジェンダーの見方を脱却し、ジェンダーの捉われから自由になることである。ケアの倫理が提起しているのは、これまでの人間観、倫理観そのものの捉えなおしであって、人間そのものおよび道徳性そのものを問題にする地点から、いまだない新しいパラダイムに向けて「生活世界を生きる人間の学としての倫理学」を提言したいと思う。

従来の伝統的パラダイムからパラダイムシフトすることによってみえてくるのは、対象としての他者ではなく、ともに生きあうあなたとして相互の尊重のもとで出会われる他者である。この新しいパラダイムでは、もはや生物学的性としてのジェンダーは関係がない。そこで重要となるのは、心理・社会的性としてのジェンダーを生きる多様な人間（男女）の心理的事実とその関係であり、関係を生きあう者同士の倫理（正義）が問題として浮上するはずである。また、生物学的性が関係ないのだから、男性＝正義指向、女性＝ケア指

向に拘泥する必要はなく、男女にかかわらず状況に応じて2つの指向を使い分ける道徳性が求められよう。むしろそこで問題となるのは、状況のなかにあって状況に捉われることなく正しい行為を判断できる人間自身であり、しまやギリガンが指摘するように、問われているのは自立の問題なのである。この自立の問題を解明していくためには、心理学における経験的研究だけではおそらく充分ではない。体験にもとづく人間の生（性）の意味を探求する哲学的原理解明が不可欠であると思われる。

おわりに

本稿では、ジェンダーを捉える視点の歴史の変遷を軸に、ギリガンの研究が心理学にもたらした新しい視座と研究パラダイムの意義について検討し、ケアの倫理を倫理的次元におけるパラダイムシフトとして捉えることの意義を考察した。生物学的性にもとづくジェンダーの見方に規定されたところでケアと正義を論じることには、すでにしてジェンダーバイアスが含意されている。だが、ケアの倫理をパラダイムシフトと捉えることによって、ケアの倫理は、単なる女性の道徳性としてではなく、生活世界を生きる生活者の視点からみた人間世界の正義（正しさ）の問題として捉え直されることになる。ギリガンは「ケアの倫理のいかなる議論も枠づけの問題とともに始めなくてはならない」（Gilligan, 1995:125）と述べている。心理学と同様哲学倫理学もまた、生活世界を切り離れたところとなりたっている。今必要とされているのは、人間の生きる世界に目を向け、人間自身を問う人間学的な視座である。しまが提言した「人々について語るのではなく、人々とともに語る」あり方としての新しいパラダイムの方法論は、現在「現象学的方法」と呼ばれる質的研究において、心理学・社会学・看護学など分野を超えて広がり発展しつつある。今後重要なことは、哲学倫理学が従来のパラダイムを超えて、「生活世界を生きる人間の学としての倫理学」という新しいパラダイムに向かうことであるように思われる。

参考文献

- ・ 青野篤子（2008）「ジェンダー概念の変遷」青野篤子・赤澤淳子・松並知子編『ジェンダーの心理学ハンドブック』ナカニシヤ出版、307-321頁。
- ・ 東清和（1997）「展望：ジェンダー心理学の研究動向——メタ分析を中心として——」『教育心理学年報』

第 36 卷、156-164 頁。

- Gilligan, C. (1982). *In a Different Voice : Psychological Theory and Women's Development* , Harvard University Press. (=キャロル・ギリガン (岩男寿美子監訳) 『もうひとつの声——男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティ』川島書店、一九八六年)。
- Gilligan, C. (1987a) Moral Orientation and Moral Development. In: V. Held(Ed.), *Justice and Care*. Boulder: Westview Press, 1995, 31-46.
- Gilligan, C., & Wiggins, G. (1987b) The origins of morality in early childhood relationships. In: J. Kagan & S. Lamp, (eds.) *The emergence of morality in young children*. University of Chicago Press. 277-305.
- Gilligan, C. (1994b). Afterword: The power to name. In: *Feminism and Psychology*, vol.4(3), 420-424.
- Gilligan, C. (1995). Hearing the Difference: Theorizing Connection. In: *Hypatia*. vol.10, No.2 (Spring 1995), Blackwell Publishing. 120-127.
- ジョルジ, A. (1981) 『現象学的心理学の系譜——人間科学としての心理学——』勁草書房。
- Held, V. (2006), *The Ethics of care :Personal, Political, and Global*, Oxford University Press.
- 伊藤裕子 (1984) 「心理学における性差研究の動向とその社会的背景」『女性学年報』第 5 巻、23-35 頁。
- Jaffe, S., & Hyde, J.S. (2000) Gender differences in moral orientation: An meta-analysis. In: *Psychological Bulletin*, 126, 703-726.
- Kitzinger, C., & Gilligan, C. (1994a). Listening to a different voice: Kitzinger, C. interviews Gilligan,C. In: *Feminism and Psychology*, 4(3), 408-419.
- ラビノヴィッツ, V.C.・マーティン, D. (2004) (森永康子訳) 「選択とその結果——ジェンダー研究における方法論的問題——」R. アンガー編 (森村康子・青野篤子・福富護監訳) 『女性とジェンダーの心理学ハンドブック』北大路書房、32-60 頁。
- 森永康子 (2008) 「ジェンダー研究の方法」青野篤子・赤澤淳子・松並知子編『ジェンダーの心理学ハンドブック』ナカニシヤ出版、322-338 頁。
- 品川哲彦 (2007) 『正義と境を接するもの——責任という原理とケアの倫理——』ナカニシヤ出版。
- しま・ようこ (1985) 『フェミニストサイコロジー——女性学的心理学批判——』垣内出版。
- 湯川隆子 (1995) 「性差の研究」柏木恵子・高橋恵子編『発達心理学とフェミニズム』ミネルヴァ書房、116-140 頁。
- 湯川隆子 (2012) 「ジェンダーと発達」高橋恵子他編『発達科学入門』東京大学出版会、167-187 頁。
- 鷺田清一 (2013) 『おとなの背中』角川学芸出版。
- Walker, L. J. (1991) Sex differences in moral reasoning. In: W. M. Kurtines & J. L. Gewirtzz (Eds.), *A*

Handbook of moral behavior and development, vol.2, Erlbaum: Hillsdale, NJ. 333-364.

- Walker, L. J. (2006) Gender and morality. In: M. Killen, & J. Smetana (Eds.) *Handbook of Moral Development*. Erlbaum. 93-115.

注

- 1 ジェンダーの視点は、第二派フェミニズムに端を発する女性学やジェンダー研究の中核であるジェンダーの概念から発展してきた。湯川によれば、ジェンダーの視点とは、「人間についてのさまざまな事象や問題の中にジェンダー・バイアス、すなわち、近代市民社会の構造や価値規範に強く影響された男女間の権力関係に基づく差別や抑圧が潜んでいないかを点検する視座」であり、今では全ての科学・学問で重視されるようになっている（湯川，2012:168）。
- 2 本稿で「生物学的性にもとづくジェンダーの見方（観点）」という場合、近代の性別役割分業にもとづく二分化された性を見方を意味する。
- 3 ウォルカーは、コールバーグの評定法を用いて道徳推論の発達における性差を調査した全ての研究をレビューしたメタ分析を行っている。その結果、80の研究における152のサンプル（計10,637人の被験者）のうち86%（130サンプル）で性差に有意差はみられず、残りのうち6%（9サンプル）が女性に高い有意差を示し、9%（13サンプル）が男性に高い有意差を示した。また、教育と職業レベルを補正した調査においては発達段階における性差が常に消失することからコールバーグの発達段階説に性差は生じないことが示された（Walker, 1991）。その後ウォルカーは、これまでに蓄積された一連の検証研究をレビューし、心理学理論に女性の経験を含めるよう関心を促したギリガンの貢献を否定しないものの、コールバーグ理論における性差のバイアスも道徳的指向の性差も実証的に検証されず、ギリガンの主張は大体において誤りであると総括し、今後は性差の問題は忘れてより重要な関心に焦点を向けかえる時期であると述べている（Walker, 2006:109）。また、ジャッフェ等は、女性が男性よりも配慮指向（care orientation）を用い、男性が女性よりも公正指向（justice orientation）を用いる傾向があるというギリガンの主張を検証するために、2つの道徳指向の性差に関し約20年にわたり蓄積された113の実証研究を概観し、変数を補正したメタ分析を行っている。その結果、配慮指向では160サンプルのうち73%、公正指向では95サンプルのうち72%で性差に有意差はみられなかった。道徳推論においては公正指向と配慮指向の2つの指向が認められるものの性差との強い関連はみられず、どちらの道徳指向を使うかは文脈やジレンマの内容に左右されることが示された（Jaffe & Hyde, 2000）。ジャッフェ等は、この実証的検証の成果を踏まえ、今後心理学研究者は道徳推論における性差の議論を超えて、代わりにいかに個々人が正義推論とケア推論を統合するのか、ど

んな条件のもとにいずれが道徳的行為にとってより適切な基礎であるかを決定するのかを重視していくべきであると述べている (ibid.:720-721)。

- 4 ギリガンによれば、女性の発達研究による成果とその理論は、抑うつや摂食障害など臨床実践における観察と理論に強い妥当性を見出しており、発達臨床心理学において革新的な経験的研究が増加しているという。「現在心理学には、経験的研究・発達理論・臨床実践に関し実際的かつ本質的な違いから生じた境界がある。(中略) フェミニスト心理学者はこの境界の双方の側に立っているのである」とギリガンは述べている (Gilligan, 1994b:422)。
- 5 1879年ヴント (Wundt, W.) がライプチヒ大学に心理学実験室を創設し、哲学から自立した科学としての心理学が誕生した。
- 6 性に関する概念には主にセックス、ジェンダー、セクシャリティの3つがあるが、日本語の「性」という言葉は非常に多義的で、「性差」という場合、セックス差 (生物学的性差) なのかジェンダー差 (社会的文化的性差) なのか明確でない。文脈においてセックス差あるいはジェンダー差として読みとれる為そのまま「性差」を用いる。
- 7 心理学ではおおむね、ジェンダーを社会的・文化的・心理的に構築される性 (性別) の意味で「心理・社会的性」と説明し身体的・生物学的性 (sex) とは区別して用いており、本稿もこの見方に従う。ただしジェンダー概念については、研究者や立場によって様々な定義があり、また「性現象の観察とフェミニズム思想や認識論の両方を背景にしていることが、ジェンダー概念を複雑にしている」(青野, 2008:313) と言われるように、ジェンダー概念の普及に伴い、心理学においてもジェンダー概念の定義は複雑・多義化しているといわれ、セックス (sex) とジェンダー (gender) との関係についても様々に議論されているところである。
- 8 性度研究は、性差を量的差異 (性度) として捉えるもので、男性的特性と女性的特性を1次元上の対極におき、すべての個人をその次元上のどこかに位置づけるという構成原理をとっており、性度を測定するための性度尺度が多数作成された (湯川, 1995:121-122)。
- 9 伊藤によれば、Maccoby & Jacklin の研究の結果、性差がみられたのは、女子の言語能力の優位性および男子の視覚的空間認知能力・数学能力・攻撃性の優位性のみで、その他の特性・領域については、いずれも性差が確立していないか、どちらとも言えないものであった (伊藤, 1984:23)。
- 10 たとえば、Maccoby & Jacklin による成果をメタ分析によって再検討した Hyde の研究では、言語能力や空間認知能力、数学能力は指摘されたほど性差が顕著ではないことが示された (東, 1997:156-159)
- 11 しま・ようこ『フェミニストサイコロジー——女性学的心理学批判』(1985) は、ギリガンとほぼ同

時期に、日本の心理学にまだフェミニズムの視点がなかった時代に先駆的に性差心理学の批判を試みた書である。

- 12 以上のようなしまの性差心理学批判は、決して実験や質問紙調査などによる実証的な研究を否定するものではない。ジェンダーの心理学が発展してきた現在では、質的研究と量的研究を両方使うミックスメソッドまで研究手法は多岐にわたっており、研究者自身のジェンダーバイアスに対する自覚と立場を明確にした研究報告が重要とされている（ラビノヴィッツ・マーティン，2004；森永，2008）。
- 13 しまは「生活世界」という言葉を説明なく用いているが、しまが主にジオルジの『現象学的心理学の系譜』を参照していることから、ここで用いられている「生活世界」概念は現象学の創始者フッサールにその系譜をたどることができる。ジオルジによれば、「生活世界とは日常の体験においてわれわれが出会う世界、われわれがそのなかで自分の目標や目的を追求する世界、われわれのいっさいの人的活動の場としての世界である」（ジオルジ，1981:177）。
- 14 ギリガンは、関係性のパースペクティブを考慮にいれることなく、「道徳性が正義の問題であるのかケアの問題であるのかを議論することは、うさぎ—あひるの反転図形が実際にうさぎなのかあひるなのかを議論することと同じ」（Gilligan, 1987b:294）むなしい議論だと述べている。
- 15 ヘルドは、ケア関係は正義が適用される道徳的枠組みよりも広く規範的にもケアのほうが正義に先行するとして、倫理の規定にケアを基礎づけ、ケアと正義との関係を編み合わせ（enmeshment）の比喩で説明している。
- 16 品川は、ギリガンが『もうひとつの声』の末尾で示した「結婚の比喩」よりも、後の論文（1987）で示した「反転図形の比喩」のほうが適切であり、「ひとりの人間における統合をもって成熟とする前提はもはやない」のだから、複数の人間による対話において2つの倫理の相補的な関係を築くことができるのみている（品川，2007:163-164）。筆者の見解では、2つの比喩のあいだでギリガンの見解が変化・修正されたわけではなく、ひとりの人間においてケアと正義双方の見方をもつことを成熟とみる視点はギリガンにおいて維持されており、本稿は成熟の観点からみた2つの倫理の関係を重視するものである。